

**令和3年度  
第5回理事会議案書**

**第1号議案 研究事業進捗の件**

## 第1号議案 研究事業進捗の件

研究事業は、8校が実施しており、次の研究テーマで実践研究絵を実施して、現在、そのとりまとめを行っている。

論考「未来に向けたオリ・パラ体験～特別支援学校のスポーツ活動の充実に向けて～」は、北海道教育大学 教育学部岩見沢校 教授越山賢一氏が執筆され、すでに原稿を頂戴している。

### 1 論考の概要

2021年、1年遅れの2020東京オリンピックとパラリンピックは日本選手の活躍もあり、記録と記憶に残る大会として幕を下ろしました。開催都市である東京都ではコロナの第5波が猛威を振り、医療機関が逼迫し、コロナの急激な蔓延はなんとしても押さえなければならぬ状況でしたから開催反対が向かい風となる厳しい状況でした。

しかし開幕100日を切った辺りから、オリンピック開催に舵が切られました。その後、マスコミによる情報量が多くなるとともに、関係各位の尽力、医療機関従事者やボランティアの活躍、さらに選手の強い自覚のアウトプットによって少しずつ国内の熱が高まってきました。

その中で残念なことは、メダルの色や数に固執する報道が目についたことです。スポーツはその種目において平等なルールのもとで優劣を競います。したがって力があってもメダルに届かなかった選手、参加選手の中で一番の努力をした選手、生活のすべてを投げ打って大会に臨んだ全ての選手の首にメダルが下げる事が出来ない、というスポーツの残酷な一面を伝えきれていなかった事です。

メダルを取ることは我々には想像もつかない名誉な事ですが、メダルを取れなくても胸を張ることの出来る選手は多いはずです。負けたことや自分自身の目標を越えられなかったなどの悔しさはあるでしょうが、そこから生まれるスポーツの喜びや達成感、あるいは難しさなど、もう少し発信してもらいたいと思ったのは私だけではないでしょう。

選手たちの人知れない努力や苦勞、押しつぶされそうな精神的プレッシャー、達成した喜びや開放感といったさまざまな感情を感じ取り理解することはきっと困難だと思います。それでも選手たちの何十分の1、何百分の1でもそれを共有しようとテレビの前で応援し、研ぎ澄まされた選手の技量や垣間見える人間性に心を打たれました。私は特にボッチャの杉村英孝選手の神業と言える投球に声を上げるほど魅せられました。想像を超える集中力から繰り出されるコントロールの効いた投球にはハンドがあるからではなく、純粹にスポーツの持つ魅力によるものだと改めて認識させられました。

### 2 研究実践校の研究概要

#### ① 北海道手稲養護学校三角山分校

研究テーマ

三角山分校の体育授業の実践を通して  
～神経筋疾患の生徒のコミュニケーション能力の向上を目指して～

本研究は、オリンピック・パラリンピックを通じて、あらゆる競技に興味・関心の幅を広げ、様々なスポーツの楽しさや価値を深めることを目標に研究を進めた。

本分校の生徒は、病気の進行に伴う転学・進学をしてくる場合が多い。

運動機能が低下により、保健体育の授業を主体的に活動できず、スポーツへの喪失感を抱いてきた生徒も多い。

また、興味・関心の幅が極端に狭く、病棟生活の余暇時間を、ゲームをして過ごしている生徒がほとんどである。

これまでも、神経筋疾患や重度重複障がいの子供生徒一人一人が主体的に学習に参加し、自己肯定感を高めることができるよう、本分校独自のルールによるスティックスポーツやハロウィック水泳法など指導内容や教材の工夫を図り、保健体育の授業を実施してきた。

しかし、本分校独自のルールにも限界があり、中学校・高等学校における体育で学習すべき陸

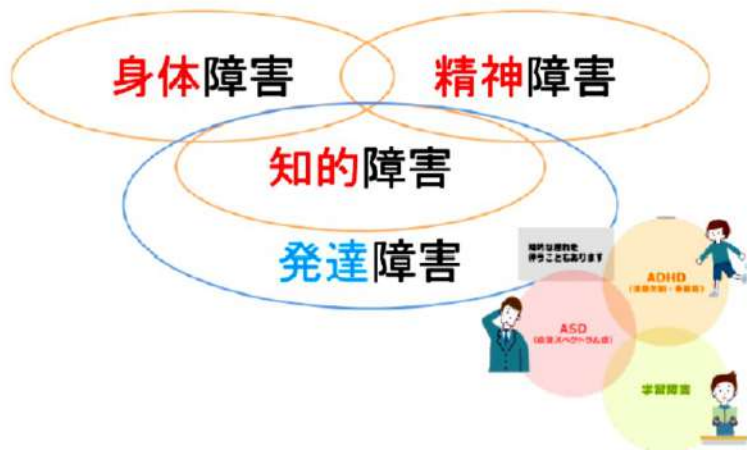
上競技や武道などの授業を実施することができなかった。そのため、東京オリンピック・パラリンピックの開催に合わせて、今まで指導することができなかった競技について学習することとした。

## ② 市立札幌みなみの杜高等支援学校

研究テーマ

知的発達障害のある生徒に合ったトレーニング方法をさぐる  
～本校サッカー部の実践から～

<図 1>



本校は、開校から5年目を迎えた北海道唯一の普通科職業コース制を導入した特別支援学校である。今年度の総生徒数は159名で、本校に入学してくる生徒は、知的障がいを中心として診断されているが、LDやADHDなども併せて診断されている生徒も多い。(図1・2参照)

部活動では、週に1～3回程度行っている。人数が少ないためゲーム形式の練習を行うことが難しい部分がある。また、本校はサッカー、野球、バスケットボール、バドミントン、陸上、音楽、アート、茶道部の8つの部活動があり、夏場はグラウンドでの練習が確実に確保できるが、冬場は、体育館の使用が困難で、練習時間の確保に課題がある。

本校サッカー部では、試合に「勝つ」ことを目的とした生徒とサッカーを通して、友達づくりやストレス発散など「楽しむ」ことを目的とした生徒が共存している。今年度の活動の中

<図 2>



でも、目的の違いから上手く練習参加できない生徒も数名出てきていたことが本研究のきっかけとなった。部活動における、生徒たちのニーズを考察することは、モチベーションの向上やサッカーを愛する気持ちを高めることにつながると考える。本研究では、それらを踏まえた上で生徒たちに合ったトレーニングとは何かについて考察していく。

## ③ 北海道真駒内養護学校

研究テーマ

第35回北海道肢体不自由養護学校体育大会のオンライン開催に向けた取組

第35回北海道肢体不自由養護学校体育大会(以下、肢養体とする)が8月31日に道内肢体不自由養護学校7校をオンラインで結び開催された。近年、遠隔地校は児童生徒数の減少や障がいの重度・重複化による長時間移動の負担、開催地への移動や参加への予算確保の課題があった。

また一昨年からの新型コロナウイルス感染症のリスクなどが大会開催の大きな課題となっていた。

平成29年度、北海道肢体不自由・病弱教育副校長・教頭会が中心となり、遠隔システムを活用した体育大会の実施に向けて協議をはじめ、令和元年度に一部遠隔地校と主会場校をオンラインで開催したが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症の拡大の影響もあり中止となっていた。

北海道肢体不自由・病弱教育副校長・教頭会は令和2年度に令和3年度の開催に向けた、具体的な検討に着手するため、ワーキンググループの設置を行い、素案の検討を行った。

令和3年2月の肢体不自由・病弱教育校長会、副校長・教頭会において大会の方向性を固め、令和3年4月からは開催校の手稲養護学校の実行員会を中心に各校の代表者と具体的な運営に関わる協議を重ねてきた。

これまでの課題解決解消を目指した肢養体オンライン開催に向けた具体的な取組内容や手順等とともに、大会の内容、当日の体制、各校からのアンケート調査による成果と課題について報告する。

#### ④ 北海道拓北養護学校

研究テーマ

北海道肢体不自由養護学校体育大会新種目提案に向けた取組について②

～特別支援学校間のハンドアーチェリー・オンライン交流内容の検討と補助具の開発を通して～

今年度も、令和2年度に引き続き特別支援学校においても新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、with コロナを受入れ新しい教育活動の創意工夫を求められている。

さて、北海道肢体不自由養護学校体育大会は、全道各地から10校が一同に介し集まる年に1度の大きな行事である。特別支援学校の設置場所は、広域に渡るため学校によっては、多額の移動費を要するため、集合形式の開催は兼ねてから懸案事項であった。

しかし、近年、こうした広域に立地する特別支援学校を繋ぐ方法として、オンライン方式が採用され実績が報告された。この実績を踏まえ、令和2年度より北海道肢体不自由養護学校体育大会もオンライン開催を検討し、令和3年8月に開催し成功を収めた。

本大会の成果は大きく、オンラインで学校間が繋がることへの物理的あるいは心理的なハードルが下がるなど、コロナ禍で急激に進むGIGAスクール構想の展開に相当な追い風になったと考える。

本大会は、当面の間は、オンライン方式で開催する予定であるが、開催方法の変更により例年通りの競技実施は困難だったため、今後は、本大会で扱う競技を再検討する必要性が生じている。令和2年度から開始した本研究の取り組みを踏まえ、本大会の正式種目になることへの期待は大きい。

#### ⑤ 北海道紋別高等養護学校

研究テーマ

ソフトボール部の指導や取り組みについて～市民大会への参加を目指して～

本校は開校から25年目を迎えたオホーツク管内で唯一の公立特別支援学校（単置高等部）です。本校には職業学科と普通科が設置されており、今年度の総生徒数は78名です。本校に入学してくる生徒は知的障害があり、協調性運動障害や自閉症スペクトラム症候群などを併せ有する生徒もいます。紋別市は人口約2万2千人でオホーツク海に面しており、水産加工業が盛んです。現場実習では、水産加工業を中心とした企業とつながり、本校の教育活動に協力していただいています。教育職員（寄宿舍指導員含む）は89名で、うち39歳以下が約80%、初任段階者職員が65%と、非常に若い年齢層や経験年数の浅い職員で構成されています。

本校の部活動はバスケットボール部、フットサル部、新体操部、ソフトボール部、卓球部、陸上部、バドミントン部、美術部、パソコン部、文化読書部の10部があり、生徒は、基本的には部活動に入部することになっており、78名中72名が加入しています。

その中で、我々ソフトボール部は今年度、3学年3名、2学年1名の4名で構成されていま

す。

一昨年の2019年には、部としては初めて紋別市内の市民大会（タナカスポーツ杯）に招待枠として教員と生徒の合同チームで参加しました。

去年、今年はコロナウイルス感染症の影響で、大会に出ることが出来ておりません。今年については研究助成費を使用させていただいて、各種道具を整備し、大会に臨むことを目標にしていたので、残念な気持ちです。初めて大会に出た生徒たちが卒業となってしまうので、冬に体育館でとなるかと思いますが、感染が落ち着いている状況下で引退試合を開催したいと考えております。

私がソフトボール部の主担当者として3年目となり、現在も日々、試行錯誤中ですが、自分の野球の経験を基に、複数の先生方の意見や情報、インターネットや書籍からの情報を統合して、生徒たちにとって、有効な指導方法とは何かを改めて考える機会になると考え、今回の研究に応募させていただきました。また、自分が学生時代にはなかった練習グッズや用具が今は豊富にあることを知り、その活用方法や効果について広く知ってもらえたらと思った事も理由です。

## ⑥ 北海道網走養護学校

研究テーマ

**多様な障害に応じたスポーツ活動の工夫、開発**

**～教材・教具の工夫と、生徒の実態に応じたルールの独自設定による実践報告～**

本校は、肢体不自由を対象とする特別支援学校であり、中学部には12名の生徒が在籍している（その他に訪問教育学級の生徒が1名在籍している）。12名のうち、身体障害のみの生徒は2名で、他10名は知的障がいや自閉症、ADHDなどの障害を合わせ有している。知的障害、発達障害の中でも重度から軽度まで幅広い知的な遅れのある生徒が在籍しており、障がいの重複と、それによる様々な実態の生徒が在籍しているというのが現状である。

また本校の特徴として、肢体不自由のある生徒のみでなく、知的障害や発達障害が主障害の生徒も多く在籍しており、多様な支援が求められる。

スポーツを行うにあたっては、二分脊椎により下肢を動かさない生徒、筋ジストロフィーにより下肢を動かさず、また筋力の低下によって上肢の可動域や力の大きさにハンデがある生徒、知的障害や発達障害によりボディイメージに課題がある生徒など実態が様々であり、生徒の実態に応じ、道具や補助具を使用したり、転倒がないよう指導者が近くで支えるなどの支援を行ったりする必要がある。

また、学部の生徒全員が同じ競技に取り組む際に、公平に競技を行うためには、教材や教具の工夫、適当な競技の選択、ルールの独自設定が必要となる。

そこで本研究では、多様な障害に応じたスポーツ活動の工夫・開発を目指し、教材・教具の工夫と、本学部の生徒の実態に応じたルールの独自設定を通して、多様な実態の生徒が楽しむことができるスポーツ活動を行うことを目的とする。

## ⑦ 北海道札幌養護学校共栄分校

研究テーマ

**重度重複障がい児が取り組みやすいボッチャの充実を目指して**

**～ランプの使用を前提としたボールの選択と独自ルールによる実践報告～**

本校は、知的障がいを対象とする特別支援学校であり、小学部10名、中学部4名、高等部5名の19名が在籍している（その他に訪問教育学級の児童生徒が4名在籍している）。19名のうち、知的障がい単独の児童は1名だけで、18名は肢体不自由または病虚弱を合わせ有している。そのうち13名の児童生徒がバギー等を使用しているなど、重度の身体障がいを合わせ有する重度重複障がい児が多いという実態がある。

ボッチャの活動にあたっては、麻痺のために手指の動きに制約が大きい児童生徒が多く、ランプ等の使用を必要とする児童生徒が大半である。

しかし、ランプは手投げに比べてボールの転がりに勢いがつきやすいために、「ねらったところよりも遙か先に転がる」「最初に的に寄せることが難しく、ゲームの後半に相手のボールを弾

き飛ばすのに適している」など、手投げよりも扱いにくいという印象がある。

そこで本研究では、ランプを使用するのに適したボールの種類を検証と、独自ルールを設定した授業実践を通し、重度重複障がい児を対象とするボッチャの充実を目的とする。

#### ⑧ 北海道新篠津高等養護学校

研究テーマ

##### サッカー部における動画を用いた基礎技術の定着(2)

北海道新篠津高等養護学校は、開校して29年目を迎えた特別支援学校である。全校生徒は135名で、その内寄宿舎に在舎している生徒は123名となっている。全校生徒の内、多くの生徒が部活動に入部し、余暇活動を充実させることができている。

運動系の部活動においては陸上部やバスケットボール部、卓球部などがあり、陸上部は毎年のように全国障がい者スポーツ大会に出場している。サッカー部においては前々年度、北海道代表として初めて全国知的障害特別支援学校高等部サッカー選手権大会に出場することができた。

また、文化系の部活動においては演劇部の活躍がめざましく、高文連に加盟し過去に全国大会出場を果たすなど、非常に部活動が盛んな特別支援学校の一つである。どの部活動においても非常に熱心に取り組む生徒が多く、学校生活や寄宿舎生活を送る上でも部活動指導における重要性は非常に大きいのではないかと感じる。